

■ 編集だより

編集後記

言うまでもなく、PubMed (米国国立医学図書館) や医中誌 Web (医学中央雑誌刊行会) などのオンラインデータベースを用いた文献検索は、現代の医師や医科学者にとって日常的作業の1つである。若手の医師には、これらも当たり前の学術環境と思われるだろうが、編集子が医師・研究者としてスタートを切った昭和の終わり頃、文献検索のために医局の先輩が手にしていたのは Current Contents® の冊子体であった。今ならコンピュータに打ち込むべきキーワードを、赤鉛筆片手に索引から拾う作業をする。見よう見まねで検索し、これはと思う文献にたどり着いたときは、それだけで一仕事終えたような喜びを覚えたことを思い出す。また、当時、大学図書館へ行くと、電話回線を使った大がかりな装置の横に司書がいて、キーワードをいくつか示して文献情報を引き出す仕組みがあった。機器が作動している時間と料金が直結しており、司書は緊張した面持ちで「36件出てきましたが、検索語を追加しますか？」などと聞いてくる。ほんの一時期、そんな時代があった。

もともとこれらは、大学院の研究テーマが決まって英語論文を探すときの作業で、それより先に、診療上必要な情報を得る目的で主に和文誌を検索するほうが日常的であった。この場合は、まず手当たり次第に医局や図書館の書棚から雑誌や成書を手に取り、末尾の文献欄から自分の求めるものに近いタイトルを探し、それを繰り返すことで目的の文献を追い詰めていくような探し方をしていたと思う。オンラインデータベースの整った現代から見れば、非効率きわまりない。しかし、この非効率の中いくつかの意義を見出すとするならば、愚かな懐古趣味と笑われるであろうか。非効率な文献検索の反復は、駆け出しの編集子にとって、ひとつの学術的テーマにどんなテーマが隣接して存在するのかを知るよい機会であった。学問とはテーマとテーマが山脈のように連なって体系をなしている、ということに俯瞰するトレーニングになった気がする。さらには、一種の勘というか、学術的に「鼻が利く」ための能力を育てる上でも役立ったように思える。

話題は少し逸れるが、原典に当たることの重要性についても編集子のささやかな体験を通して触れておきたい。

「酒食茶湯、ともによきほど思ふよりも、ひかえて七八分にて猶も不足と思ふ時、早くやむべし」[貝原益軒：養生訓 卷第三、飲食上、16 (伊藤友信訳：養生訓—全現代語訳—講談社、p.308, 1982)]。

「腹八分」として巷間に流布している養生訓であるが、実に原典では「腹七八分」なのである。10数年前、初めてこの一節を書店の文庫本に見出した時、あまりの驚きに思わずその場にへたるようにうずくまった。抗老化作用を目的とした食餌制限。霊長類の動物実験では摂取カロリーの30%低減が有効とされ、人への介入研究では15~25%カロリー低減が試みられている。すなわち、「腹七八分」は現代のサイエンスにも支持される制限法であり、益軒の著述は見事に制限の度合いまで言い当てていたのである。

布村明彦